

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：32660

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2017

課題番号：16K13204

研究課題名(和文)キプリングの後期作品における女性キャラクターの包括的研究

研究課題名(英文)A Comprehensive Study of Rudyard Kipling's Female Characters in His Later Works of Fiction

研究代表者

松本 和子 (MATSUMOTO, Kazuko)

東京理科大学・工学部教養・教授

研究者番号：90385542

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：キプリングの後期小説群に的を絞り、女性登場人物に着目した本研究は、1. 後期小説群には多数の女性登場人物が描かれており、2. そのほとんどが作中のキーパーソンとしてストーリーの展開軸の役割を果たしていること、さらに、3. 時代を追うごとに彼女たちの人物描写に円熟味が加わり、4. 後期作品の秀逸さが、従来得意とされている男性登場人物のみならず女性登場人物の描写においても力量を発揮したキプリングの作家としての成長、ならびに熟練の域に達した作家によって小説内に確固たる位置を占めるに至った女性登場人物の存在そのものにも負うところが大きい、という四点を、作品の精読と資料調査、考察によって明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Focusing on the female characters in the later works of Rudyard Kipling's fiction, which roughly means those written after around 1904, this two-year study project led to several revelations which are all expected to provide more insight into the traditional study of Rudyard Kipling.

Among those revelations, four of them are particularly important: 1) Kipling created so many outstanding female characters in his later works such as Mary in "Mary Postgate", Bella in "A Madonna of the Trenches" and Helen in "The Gardener". 2) Most female characters play significant roles like a pivot point of the story development. 3) Kipling has succeeded in improving his literary skills in depicting female characters from flat and simple to round and sophisticated. 4) Kipling's mastery of female characters creation contributes to the well-known excellence of his later works in general.

研究分野：イギリス文学

キーワード：キプリング 女性登場人物

1. 研究開始当初の背景

本研究は、2013～2014年にかけて行った科研費研究(「キプリングの事例に見る帝国衰退期英国小説におけるマスキュリニティの弱体化」課題番号2558066)の過程で、キプリングの作品における女性登場人物が、男性登場人物のマスキュリニティの弱体化ないしは喪失に大きく影響を及ぼしている事例が多々あることへの気付きに端を発する。研究期間中に発表した論文(「勝者なき復讐ゲーム『損なわれた青春』における男性登場人物をめぐる一考察」)は、この気付きが研究テーマとして発展し得るものかどうかを判断する目的で執筆されたものである。同論文は、複数の男性登場人物を弄びながら破壊させる破壊的要素としてのレディ・カストレイ像を浮き彫りにし、帝国主義的マスキュリニティを体現化した男性登場人物群とは異質の世界の住人たる女性登場人物群の存在を示唆する成果を収め、女性登場人物を包括的に研究する意義と道筋を示すに至った。その際、対象時期の選定に関しては、キプリングの長期にわたる執筆活動期、ならびに2年という研究年限を考慮し、女性登場人物が顕著になる後期の作品を扱うことに決定した。

キプリングの作品は、1950年代半ばの再評価運動をきっかけに研究活動が活発化し、特に1970年代後半のポストコロニアル批評全盛期には多数の論文が発表された。しかしながら、大多数は政治的イデオロギーや小説技法に関連するものであり、女性登場人物に着目した研究は、ジェンダー研究がかなりの程度活性化するまでほとんど行われていなかった。さらに、たとえ女性登場人物に着目していても、研究活動の主流は単独作品の論考にあり、本研究が意図する包括的研究は先行研究の数が少ない分野に数えられる。こうした状況は、先行文献からの知見を得にくいというデメリットはあるものの、見方を変えれば、本研究が従来キプリング研究に貢献できる余地が十分にあるということの意味し、本研究の開始当初の背景が、研究種目である「挑戦的萌芽研究」を遂行するのに好都合であったことが理解される。

2. 研究の目的

本研究は、キプリングの小説世界の表看板の役割を果たす「帝国主義的マスキュリニティを反映した『男の世界』」の陰で後景化されている「女性登場人物が重要な位置を占める『女の世界』」を敢えて前景化し、その存在意義の解明を狙ったものである。キプリングに関して女性登場人物の研究は、フェミニズム批評やジェンダー論の活発化を受けてはじめてスタートしたとみなせるものであり、キプリング研究の中では後発の部類にあたる。さらに、包括的研究に至っては、今後の発展が期待される分野とみなされる。よって、本研究は、その点を踏まえたうえで

挑戦的側面があると考えられ、実施するに至った。研究対象を後期に限定したのは、再評価時代に確認、認知された後期作品群の完成度の高さが「女の世界」の構築で新境地を拓いたキプリングの成功に負うところが大きいのではないかという仮説の証明も射程に入れた研究であることに由来する。研究の具体的目的は(1)後期作品の女性登場人物に係る系譜の作成と考察、(2)(1)に基づいて行われる後期作品の女性登場人物の前景化、(3)作品における「女の世界」展開例にみる同世界の存在意義解明の三点にある。

3. 研究の方法

本研究は、二年計画であることに留意し、「後期作品の女性登場人物の系譜作成と考察」と、その結果を踏まえた「後期作品の女性登場人物の前景化と『女の世界』の顕在化のための研究と成果発信および総括」の二段構えで実施し、各々に一年ずつを割り当てた。初年度に限ってはさらに年度を前半と後半に分割し研究の進捗が把握しやすくなるよう工夫した。各期間について、テーマと短期的な目標を掲げ、具体的な結果が得られるように研究の推進を図った。研究は一貫して研究代表者による単独研究のスタイルを維持し、いなか年度においても研究分担者や協力者は定めずに行った。以下、具体的に方法を記す。

【平成28年度】(平成28年4月1日～平成29年3月31日)

<前半>(平成28年4月1日～平成28年9月30日)

[テーマ]: 後期作品の女性登場人物に係る系譜作成 その1

[目標]: 論文による成果発表

[活動内容]:

- (1) 執筆活動後期前半期(1904～1913年)の作品精読
- (2) 文献・資料研究
- (3)(1)および(2)の結果に基づく女性登場人物の系譜作成
- (4)(3)の考察に基づく論文執筆と成果発信

[活動方法]:

- (1) 予備研究において重要作品と目した『ミセス・バースト』を本活動期間中の研究の中心に据え、時系列での作品の読み込みを始めた。
- (2) キプリングの女性登場人物には、実生活においてキプリングの周辺にいた現実の女性のイメージが投影されているという多くの批評家の指摘に基づき、正確さの上で定評のあるバイオグラフィーや研究書のほか、書簡、キプリングの妻の日記を対象にした伝記的研究を進めた。
- (3) *Kipling Dictionary* や *Companion* の類を利用し、系譜作成に必要な女性登場人物の抽出を行った。

(4) 後述する学会発表を行うと共に、Proceedings および論文執筆の準備を行った。

<後半> (平成28年10月1日～平成29年3月31日)

[テーマ]: 後期作品の女性登場人物に係る系譜作成 その2

[目標]: 系譜の仕上げと初年度の総括

[活動内容]:

(1) 執筆活動後期後半期(1914～1932年)の作品精読

(2) 文献・資料研究

(3) (1)および(2)の結果に基づく女性登場人物の系譜作成と検証

(4) (3)の考察に基づく成果発信準備

[活動方法]:

(1) 同年度前半期の継続研究として、執筆活動後期残りの作品を時系列で精読した。今回の区分には、第一次世界大戦が含まれているので、戦争を主題とした作品にウェイトをかけることを心がけた。

(2) 第一次世界大戦を歴史的観点から考察する目的で、一般的な学術研究のみならず、*The Illustrated War News* や戦争画、プロパガンダポスターなどを掲載している資料を対象とした調査活動を行った。

(3) 系譜の作成に関しては、前半期に生じた遅れを取り戻すのに労力を使った。戦争を扱った作品においては、点景として描かれている女性が多数おり、彼女たちの抽出に手間取ってしまった。

(4) キプリング協会での発表が決まったため、発表で中心的に扱う作品(『塹壕のマドンナ』)および周辺資料の読み込みに力を入れた。塹壕戦については図版資料の収集も並行して行った。

【平成29年度】(平成29年4月1日～平成30年3月31日)

<期間> (平成29年4月1日～平成30年3月31日)

[テーマ]: 後期作品における女性登場人物の前景化と「女の世界」顕在化の試みを含む研究総括

[目標]: 論文による本研究の総括を意図した成果発表

[活動内容]:

(1) 初年度の研究から得られた知見の整理

(2) 論考の対象に入れられなかった作品を対象とした考察

(3) (1)および(2)の結果に基づく総合的考察をテーマとした論文執筆と成果発信

[活動方法]:

(1) 初年度に雛形を作成した系譜を整理し、そこから推察される女性登場人物の

パターン 「運命の女」、「帝国の母」

他 をもとに彼女たちの類型化を図った。その結果、彼女たちによって構成される「女の世界」の住人の多様性が確認されたので、その点を意識した論文を執筆することを決め、準備に取りかかった。

(2) 初年度には言及するにとどまっていた『園丁』を対象に、主人公とキプリングとの距離に焦点を絞った考察を試みた。『園丁』には自伝的要素を思わせる部分が多いので、初年度に継続して自伝的研究に注力した。

(3) 『園丁』を論じつつ、キプリングの作品世界に確固たる位置を占める「女の世界」の例証と、男性登場人物によって後景化されていた女性登場人物が晩年にいたって前景化される方向性を帯びてきた事実の提示を『紀要』論文にて行なった。

4. 研究成果

[主な成果]

(1) 後期小説群において多数の女性登場人物が描かれていることの立証: 本研究の目的のひとつに掲げた「後期作品の女性登場人物に係る系譜作成」作業に伴う成果として、従来、ほとんど通説化していた「キプリングの後期小説群には女性登場人物が多い」という点について女性登場人物の抽出を通じて裏付けを与えることができた。また、数の上で多いだけでなく、子供/成人、若者/高齢者、社会的地位の高い人物/社会的地位とは無縁の人物、既婚/未婚、家庭婦人/職業婦人、というように多様性に富んでいるという点もあわせて確認することができた。

(2) キーパーソン化している女性登場人物の前景化: キプリングの場合、冒険譚や政治的イデオロギーを帯びた作品が多くを占める理由もあり、男性登場人物、それも帝国主義的理想を体現化したような男性登場人物が際立つ傾向がひじょうに強く、女性登場人物はいわば埋もれた存在に等しい。しかし、敢えて彼女たちに着目し、その言動を検証していくことにより、彼女たちこそが作品のキーパーソンとみなし得る事例が複数あることが突き止められた。たとえば『塹壕のマドンナ』は、第一次世界大戦期塹壕戦での過酷な体験で精神的ダメージを受けた青年を主人公に据えた戦争の悲惨さを訴える作品の体裁をとりながら、実際は、彼の叔母ベラと上官との生死の境界を超越した不倫を軸に展開する情念の物語の側面が強く、主人公の青年と不倫相手の彼の上官の二人を破滅させる<宿命の女>的女性登場人物ベラこそがストーリーの展開をにぎるキーパーソンであることは間違いがない。

(3) 女性登場人物の創造にみられる作家としてのキプリングの成長の顕在化: 第一次世界大戦期に集中して発表された四作品『掃き清められて飾られて』、『メアリ・ポストゲ

イト』、『塹壕のマドンナ』、『園丁』の比較検討により明らかになったことだが、各作品の主要女性登場人物は、内面描写がほとんどないに等しい平面的な人物像から、葛藤や哀愁といった内面描写が前面に出ている立体的な人物像へとダイナミックな変遷を遂げている。特に『園丁』にいたっては、多くの批評家が称賛する通り、女性主人公の微妙な心の動きが繊細な筆致で記されており、長足の進歩があったことが認められる。(4)後期作品群の秀逸さと、女性登場人物の描写におけるキプリングの進歩との相関関係の実証：長らく忘れ去られた作家の地位に甘んじていたキプリングが学術的議論の対象になる作家の地位に復活を果たす契機となった再評価の動きが、後期作品の卓越性を根拠に展開されたことが示すように、キプリングの後期作品は優れているということで批評家の見解は一致を見ている。前項(3)で記した、女性登場人物の扱いに関するキプリングの技工的冴えは、この全般的な後期作品に対する高い評価を支える要素とみなし得る。

[国内外における位置づけとインパクト]

海外への積極的な発信は別の機会に譲ることになったが、国内においては、複数回の口頭発表と論文発表へのフィードバックとして、(1)女性登場人物を対象とした研究は発展性のある見込みのある分野である(2)キプリング、それも後期の作品だけを扱うといった閉じた研究から、前後の時代、特にヴィクトリア朝の作家が描く女性登場人物像との比較を踏まえた研究に射程を広げていく必要がある(3)時代相との絡みが一面的に捉えられている感があるのでさらなる研究が求められるといったコメントを得るにいたった。本研究の位置づけからはまだまだ遠く、どの程度のインパクトが与えられたかについては今後、明らかになる部分が大いと思うが、後発且つマイナーな研究であるキプリングの女性登場人物の研究が、とりあえずはキプリング研究の一角として認知を得られた手ごたえは感じられた。

[今後の展望]

(1)論考の対象範囲を後期限定から初期、ないしは中期へと広げ、今回同様の女性登場人物研究を推進することにより、より深いキプリング、ないしはキプリングの小説の理解に達することができると思われる。

(2)今回は周辺作家への目配りがほとんどできなかったため、前後の時代の作家、特にキプリングと交流のあった作家とその作品の研究を行うことにより、彼ら/彼女らからの逆照射を利用しキプリングの新たな側面を見出せる可能性が考えられる。

(3)今回、女性登場人物を跡付ける過程で、彼女たちの大多数が患っている、あるいは病気がもとで命を落とすことに気付いた。<キプリング>、<女性登場人物>、<病氣>と

いう三つをキーワードにした研究がすでに実施されているのかどうかは調べる必要があるが、仮に実施されていない、または発展中というようなことであれば、今後、とりこんでみたいと思う。

[予期していなかった新たな知見]

本研究は、過去に行った科研費研究と連続性を持つものであり、予備研究をかなり念入りに行ったために予期しない事態は特に起こらなかった。しかし、前述の<病>との関わりについては、研究実施前に比べて関心が強まったのは事実であり、伝記的研究によって調べられたキプリング自身の健康不安、ひいては大英帝国終焉期にイギリス国内に蔓延した社会不安や、ドイツの脅威に関連する大戦への不安との関係から、今後論じるトピックになりうる感覚を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

著者名：松本和子

表題：『『園丁』にみる作者とヒロインの距離』

雑誌名：『東京理科大学紀要 教養篇』

第50号 2018年

pp.139 - 156

(査読有)

著者名：松本和子

表題：『後期キプリング作品における女性登場人物 第一次世界大戦を背景とする作品の場合』

雑誌名：『東京理科大学紀要 教養篇』

第49号 2017年

pp.15 - 32

(査読有)

著者名：松本和子

表題：『キプリングの変容する女性登場人物に関する一考察 第一次世界大戦を背景とする作品を中心に』

雑誌名：日本英文学会第88回大会

Proceedings

第1巻 2016年

pp.65 - 66

(査読無)

[学会発表](計 2 件)

発表者名：松本和子

学会名：キプリング協会

標題：『塹壕のマドンナ』における暴力性戦場に現れた<宿命の女>

発表年月日：2017年3月25日

会場：和光大学

発表者名：松本和子

学会名：日本英文学会
標題：「キプリングの変容する女性登場人物に関する一考察 第一次世界大戦を背景とする作品を中心に」
発表年月日：2016年5月29日
会場：京都大学

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 和子 (MATSUMOTO, Kazuko)
東京理科大学・工学部教養・教授
研究者番号：90385542

(2) 研究分担者

なし

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし

研究者番号：

(4) 研究協力者

なし